

台湾における廟と文化観光

～流行化した宗教と地域の賑わいを視点として～

The shrine and culture sightseeing in Taiwan

The religion that became the fashion and local turnout

中鉢 令兒^{*1}

CHUBACHI, Reiji

北海道の外国人観光客の多くを占める台湾人観光客は、大陸とは異なる台湾文化を形成している。台湾人の多くの人々は媽祖廟信仰をしているが、台中、台南の媽祖廟とその関わりについて、福建省の移民の中心の一つである鹿港の天后宮（媽祖廟）とその周辺のデザインサベーターと、2000年以降流行化している台中・台南を巡礼する進香団を考察する。また、北海道台湾人観光客の土産に人気のあるご当地キティーの背景になっている、好神迎神商品との係わりについて考察をした。もって、観光消費を視野に置いた北海道観光のありかたに寄与することを目的とする。

キーワード：鹿港 媽祖廟 進香団

1. はじめに

台湾文化は、1624年オランダ軍の安平の上陸によって先住民族の地から1662年の鄭成功の勝利までオランダの支配する地となった。その後清朝、日本に支配が変わりながら台湾文化は形成されてきた。こうした中で台湾の街は、都市化が進んでも媽祖廟を中心と曾田生活が存在し、各媽祖廟は賑わいを見せている。日本の正月など特別な日を除いては、賑わいを見せない寺社仏閣とは異なり、日常生活に組み込まれている。20世紀の国民党関係を除き台湾の先住民族以外の多くは、16～18世紀に福建省など大陸南部からの移住者である。彼等は、海運業で生計を立てる物も多く、母村の海運の守り神である媽祖廟信仰が台湾でも信仰の対象となっている。また2000年頃から、「進香」の行事も盛んになり国内外の観光客も訪れるイベント化が進んでいる。進香団は、概ね7～8日の行程であるが、1泊2日の部分参加のツアーも出ているほど、緩やかな信仰として普及している。こうした廟信仰は、各地方都市の観光地の重要な観光箇所となっている。さらに、神様を人形にあしらった「好公仔」は、廟や全家超商（ファミリーマートの現地法人）の売れ筋の一つでもありお土産となっている。また北海道土産のご当地キティーは、この延長上にあると推測される。本稿では、台南台中地区の3大媽祖廟の一つ鹿港化地区の観光資源と廟について、媽祖廟関連商品の大衆化について考察をするものである。他方、日本の台湾観光の廟ディストネーションの理解に寄与することを目的としている。

2. 台湾の一村一廟の歴史

福建、広東の大陸華南地方からの台湾移住は13世ごろ¹が最初である。その後盛んになったのは16世紀後半ごろで、台南、高雄、北港から移住が始まった。したがって、台南には17世紀、台中には18世紀の大陸文化を色濃く残している。これらに移民団は、村の守護神を携えて移住し、各開拓村で廟を建設しコミュニティを維持してきた。これらの集団の基盤となるのは、各開拓村の境界線の争いと水利権の争いによるものである。郭らの指摘によれば、福建系開拓民と広東系開拓民との争いは絶えず生じ、廟はその自衛と自治の拠点として機能していたと指摘²している。また廟は攻撃の目標となり、その守護神を破壊し汚すことが処理とみなされていた。したがって、城壁門と戦闘訓練の可能な広場を持った構造になっており、街の中心に位置するのが常であった。またそうした機能は、外部からの悪霊を防ぐために市街地の端に寺社を置いた日本とは異なる点である。廟は、あくまで実利にもとづく信仰の対象であって、霊魂の世界とは程遠いものである。こうした実利に基づく廟は、多神合祀の形態をとり地縁、血縁を超えた、多くの人が信仰できる宗教となっている。したがって廟の形式も多様な形を有し廟頂、亭仔頂に多様性が見られる。

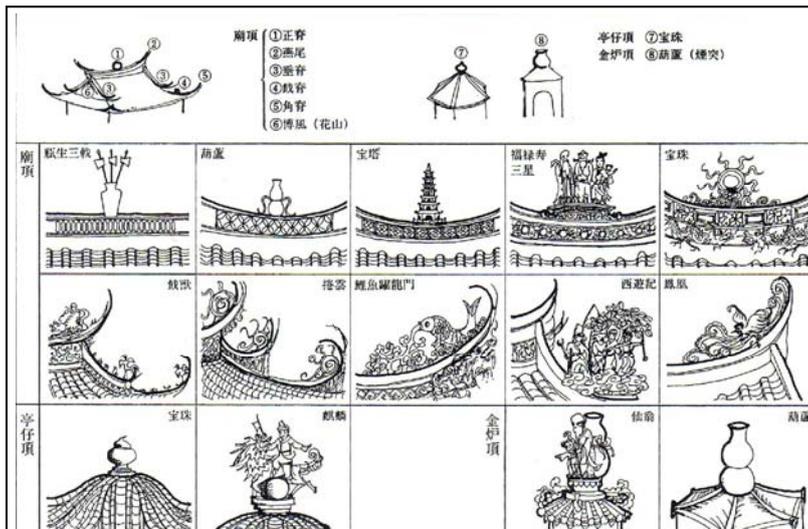


図1 廟の屋根飾り (郭中端等台湾より転載)



図2 鹿港媽祖廟本殿廟頂飾り



図3 鹿港媽祖廟山門廟頂飾り

また各地域の廟は、その繁栄を誇る象徴としても示され都市基盤の一つであったと推測される。例えば、鹿港廟では、廟頂の山門に福禄寿三星、本殿に宝塔が簡素に揚げられているが、台北近郊の九份の廟では、もっとも繁栄した銀鉞山最盛期に改装したと思われる装飾過多の廟頂である。こうした例は、台南地方の廟頂でも見られ工業の発達した高雄でも装飾過多となっている。



図4 九份の媽祖廟山門廟頂飾り



図5 高雄王爺廟山門廟頂飾り

3. 賑わいの背景

鹿港媽祖廟の天后宮は、3大媽祖廟の一つのため多くの参拝者が訪れている。その背景には、廟の成立過程が存在している。廟神の伝来には、「分身」「分香」「漂流」の種類がある。郭らは、分身は、「神像に似た新しい彫刻を他の祠や廟に移されたもの」分香は、「線香の灰をお守りとしていたものが分割されて祭祀される場合」「漂流」は、王爺は疫病神であり、疫病などが流行した町が厄病退治に船に乗せ流した王爺が流れ着いた街で、その祟りを防ぐために祭ったもの³と要約している。またこうした分紳習慣によって4000以上の寺廟が存在し国民の生活に根差した宗教施設となっている。また、親廟に当たる廟の神格の高い神様に、「地方の神様が詣でる」という習慣があり、この神様詣では、規模の違いはあるが、探子馬(1)、頭旗(1)、大灯(2)、三旗(3)、媽祖の旗(2)、媽祖護衛(89)、36護旗(38)、2将軍隊(2)、3大旗(3)、號頭哨角隊(4)、令旗(4)、神傘(1)、媽祖神輿(8)よって構成されている、最低人数127人の大所帯で、その後ろに進香団と呼ばれる信者が続いている。台中・台南でその規模は大きく、1694年に創建された北港媽祖廟(朝天宮)への進香団が最も大きいと言われている。その背景には、台湾の近代世が台南から始まった歴史が存在している。今日に至る台湾の土地所有制度は、鄭成功の下で陳永華によって創られたが、先住民と移民者の現に所有している土地は、侵さないとの条件で開墾が始まった。この開墾の中心は、「常磐田」(屯田)と言われるもので、大規模な常磐田は40数カ所に及んでいる。この開墾は現在の台南周辺が中心で、打狗(高雄)、左營、新宮、北港、嘉義などを核として進められた。また斑模様のように、台中の鹿港、沙轆、台北部の淡水、基隆などの周辺も開墾⁴が進んだ。北港の媽祖廟は、明鄭成功時代に移民した福建省移住者によって開墾

された場所に位置し、媽祖廟の総本山とされ福建省の開拓移民が航海の無事を感謝して建立した廟である。したがって台南地区の移民者にとっては、重要な廟であり、開墾が始まった郭成功時代の中心的媽祖廟となった。こうしたことから各地の進香団は、地元の廟から媽祖様を神輿に載せて、参拝に来るのである。



図 6 進香団 (三旗、伝統楽器隊)



図 7 進香団 (廟で休息する二將軍隊)



図 8 進香団 (媽祖廟神輿)



図 9 進香団 (祭壇の紙銭を燃やす迎神)

4. 進香団と宗教性

進香団は、地元の媽祖様を載せて北港媽祖廟 (朝天宮) へ向かうのだが、その途中の媽祖廟を持つ村や町を巡回する。こうした進香団が通る町では、食事や飲み物を用意して歓迎する。進香団の行進は、夜から朝にかけて行うのだが、日中は廟や木陰や民家の軒先で休息を取る。また途中から進香団に加わるものも多く北港に着くころには、数万にも及ぶとされている。志賀市子は、進香団の目的について、「ある廟が別の廟に進香団を送る目的とは、訪問先の媽祖廟で『割火』(または刈火)の儀礼」⁵⁾を行なうこと指摘している。割火とは、「小廟または分靈廟が、同一の神が祀られている祖廟に巡礼し、香炉の灰を大廟(祖廟)の香炉に混ぜ、その香灰の一部を持って帰り、自分たちの廟の香炉に入れるという儀礼で、割火を行うことで神の霊力を補充、または増強できる」

6 といった信仰からきていると指摘している。この進香団参加の流行を、ファミリーマート（全家超商）は、販促用品のキャラクター開発で、進香団に関心を持つ人とその周辺をターゲットした「好神好仔」をプロモーションした。この背景には、「進香団に参加している人が必ずしも熱心な信徒ではなく、台湾人に広がっている国民的信仰でかつ文化になっている」⁷と言った分析に基づいていた。この販促事業は、2007 年以降効果を挙げたが、更にキャラクター景品として、関羽公、武財神、釈迦、城隍爺、達磨祖師などの 8 種類の好神迎神を加えた。また、各廟の周辺のお土産屋さんでも、同様なキャラクター商品が売られるようになった。特に 2000 年以降民間信仰に対応したキャラクター商品の販売と購入が、ブームとなった。



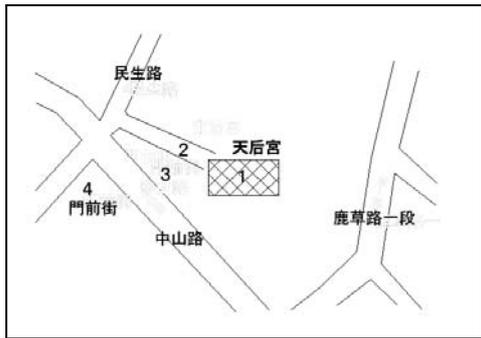
図 10 好神迎神（釈迦）



図 11 好神迎神（五路財神ストラップ）

5. 核施設媽祖廟と街並み

鹿港は、清時代の煉瓦造の街並みが残る「一府、二鹿、三孟甲」（一に台南の安平、二に鹿港、三に台北の萬華）と言われた台湾を代表する港町である。1662 年に鄭成功が台湾をオランダから解放し主権を握り、開墾によって屯田を生みだした台中の中心都市である。明時代の福建省の移民が台中で最初に着いた都市であり、この街の媽祖廟は、無事に航海を終えた感謝とお礼の廟として栄えていた。1945 年以降この街が近代化の進展を受けなかったのは、鉄道敷設の折有力者が風水敷設により風水の乱れが生じると言って反対したことによることが原因である。そのため繁栄からほど遠く台北や高雄が工業都市化を果たし、近代化を進めていたのに反して古い町並みが残ったが、媽祖廟が 3 大媽祖廟であったため、賑わいはそれほど衰えなかった。また、郭中端の台湾研究でも、進香団が鹿港天午宮で 14:00~24:00 まで休息を取った記録が残されている。台中・台南の進香団の盛んな地域から鹿港の廟を訪れることによって、門前街はそれなりに栄え続けていた。その後の観光ブームによって台中観光で訪れる場所となった。郭中端らの研究によれば、廟は、役場、公民館、学塾、対外交渉、町内の紛糾調停機能など役割を担っていたと指摘している。交易流通の商会組合の事務所を担っていたりもした。こうした側面は、観光資源以上に地域のコミュニティを支える重要施設である。



1 天后宮（媽祖廟）



2 山門前の広場



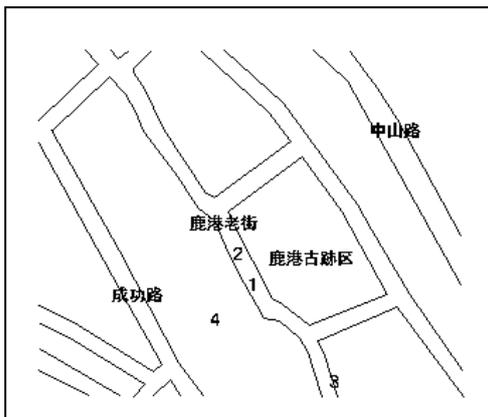
3 広場の露天



4 民生路の門前街



図 12 鹿港天午宮（媽祖廟）の周辺環境



1 鹿港老街街並み



2 清時代の福建省南部の住戸



3 住戸を利用した商業施設



4 成功路を繋ぐ路地



図 13 老街埔頭街

鹿港では、生活に根付いた天后宮や龍山寺の参拝や、老街の埔頭街の歴史的建築物群を、リハビリテーション手法による整備によって、歴史的景観を持つ観光アクティビティを生みだしている。

6. 祖廟と祖宅

清時代に入ると祖廟を建てる風習が生まれ、鹿港では、1884年、丁克家の第六子である丁寿泉は進士に及第すると、亡父の孝行を顕彰する目的で、丁克家の位牌を祀り孝悌祠を建立した。丁氏の祖宅は、鹿港の学問や政治の古鎮の求心的場所で、「血族によって形成された鎮の重要かつ象徴的建物で求心力」⁸になっていたと考えられよう。また科挙で進士の地位まで修めていたことも祠から読み取れる。祖邸部分には、広間と2階部分に走馬楼があり、集会と居室部分が配置されている。さらに進むと祠が存在し、中央に位牌が並べられ、祖廟の実態を把握することができる。またこの箇所が求心的であることを実証するかのように、近隣に豪商、辜顯榮の邸宅が存在し、現在博物館として公開されている。辜顯榮邸宅は、1700年に完成した伝統的福建省南部の木造と煉瓦による古風楼、また、1919年に完成した洋楼と、洋楼と古楼をつなぐ廊下部分によ



図14 丁家祖宅



図15 丁家祖宅（広間）

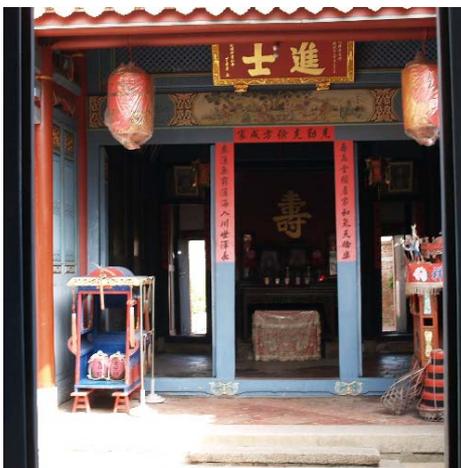


図16 丁家祖廟



図17 辜顯榮邸宅の古風楼と廊下部分

て構成されている。洋楼は、展示室となっており使い方は分からないが、古楼は、18世紀の生活の様子が拝察できる。また大邸宅には、「静謐で美しい庭」が一般的であるとの指摘通り、東屋を持った池が入り口部分に存在し中国大陸南部の形式に則っている。すなわち、母村文化が継承され続けている点が伺われる。6000点に及ぶ約200年の所蔵品は、鹿港の文化史の断面を示すが具体的文化の変遷を理解するには、効果的なインタープリテーションが不可欠である。この博物館においては、中国福建省周辺の文化の変遷をコンパクトに理解できる点が特筆できよう。



図18 辜顯榮邸宅の洋楼



図19 辜邸宅の洋楼前提の東屋と池

7. まとめ

台湾の国家意識の出現は、オランダ連合東インド会社の1924年の安平上陸以降であり、独立と主権意識は1662年の鄭成功のオランダ領からの解放に始まる。鄭成功は、大陸で清王朝に覇権を奪われた明王朝を台南で蕃主の地位で再興を目指したことから始まる。本論で展開したのは、鄭成功が国家を確立するために台南を中心に展開した明時代の中華文化の残照である。また先住民族との混血化によって、明文化は継承されていった。鹿港は台中の新興中心都市として栄え大陸文化とは異なった明文化を残していた。また媽祖信仰と進香団の風習も継承され、これら生活習慣が政治体制の変化が多いにもかかわらず、庶民段階の文化の継承が存在している。2回の調査で、台中・台南文化の特性は、概ね以下の様に要約される。

- 建国の祖の鄭成功は、あくまで明朝再興に基本を置き、権力抗争が希薄であり、明文化が継承された。
- 移民の困難さ安全性の確保の意識から、媽祖廟信仰が多くの人の共通意識であった。
- 媽祖廟信仰の割火等の習慣によって、各媽祖廟の交流、信者の交流が進香団の儀式を生み、台南台中を中心としたコミュニティが継続的に存在した。

以上の特徴は、今日の台湾独特の文化と風土を形成してきた。近年では、この台湾の風土を活用し、全家超商が、好神迎神文化を販売促進に結び付けて企業利益を得た。他方こうした好神迎神文化は、若者に台湾文化の再生を果たし、新たな進香団参加者をも

たらし、以上のことは近年の特徴として

- 流行化した進香団と好神迎神商品のブームは、台湾の若者に緩やかな宗教意識をもたらし、媽祖信仰を基礎に置いたパブリックイメージを継承させている。が付け加えられよう。

こした台湾の歴史の源は 500 年にも満たないが、そのいくつかの地域で源流をとどめている。その一つが、鹿港地区であり、残存する文化と継承されている文化である。また台中・台南の文化理解は、台湾文化の源流を実体験するうえで需要である。本稿では、生活文化のコンテクストを参照しつつ、鹿港の文化的痕跡を考察した。こした台湾文化を理解し、セグメント化した北海道の誘客振興をすることが必要であろう。

併せて、本稿が、日台友好に寄与すれば幸いである。

付記

本研究は以下の補助金の一部によって調査・検証した。

- 進香団調査 (2008.10) は、筆者前任校札幌国際大学地域・観光研究センター
 - 鹿港調査 (2014.11) は、現職北海商科大学北海道政策研究所
- 好神迎神のアメニティは、研究室所属の留学生の寄贈によるものである。

註

- 1 郭中端、堀込憲二 (1977) 台湾、都市住宅 7710、鹿島出版 P68
- 2 郭中端、堀込憲二 (1977) 前掲載、P68
- 3 郭中端、堀込憲二 (1977) 前掲載、P70
- 4 伊藤潔 (2000.) 台湾、中公新書、P32
- 5 志賀市子 (2013) 台湾における Q 版神仙ブームとその背景、国際常民文化研究叢書 (3)、P160
- 6 志賀市子 (2013) 前掲載、P160
- 7 志賀市子 (2013) 前掲載、P154
- 8 河添恵子、中国古鎮遊編集部 (2006) 中国江南、ダイヤモンド社、P.P.24-25

参考文献

- 伊藤潔 (2000) 台湾、中公新書
堀一郎 (1973) 民間信仰、岩波全書
山下晋司ら (1996) 移動の民族史、岩波講座文化人類学 7、岩波書店
川森博司 (1966) ふるさとイメージをめぐる実践、岩波講座文化人類学 12、岩波書店

註で参照した文献は省く。

(2014年12月16日受理)